

学校現場からみた教育格差—現状と課題—

学校現場で行われる教育は、子どもたち一人ひとりの将来の可能性を広げる手段である。本研究では、様々な事情により学校に行くことが難しく、不登校になった子どもたちが通う「フリースクール」という民間の教育団体・施設をもう一つの学校現場と捉え、フリースクールの活動内容やその施設の利用者について現状を明らかにしたうえで、施設の内側で生じる格差について考察を行った。

まず、文部科学省の調査をもとにフリースクールやフリースクールの利用者にあたる不登校児童生徒の概要を整理した。文部科学省の調査では、フリースクールでは多くの施設が個別や集団での学習支援や相談・カウンセリングなど、週5日以上施設を開設し行われているとしている。国内における不登校児童生徒数は2015年度時点で126,009人であり、不登校のきっかけや不登校がつづく主な理由に、学校内での人間関係が推測される。

次に、フリースクールの利用経験者であり、現在は同じ施設でボランティアとして活動しているKさんへインタビューを行い、利用者側から施設の活動内容や特色を明らかにした。Kさんは、数多くの授業や年間行事が行われる学校にて日常生活を送ることが無意識のうちに負担となり、徐々に不登校になっていった。Kさんが通うこととなったフリースクールでは、他の学校のように平日1限目から6限目まで45分授業の時間割が定められており、生徒が各自教材を持参し勉強する「個別授業」と、学年問わず全生徒と一緒に受ける「集団授業」という2つの形式を用いて授業が行われる。学校に通わなくなった子どもたちは、授業を通じた学習の他、施設に関わる幅広い年齢層との人々との交流や進路支援を通じて生き方の多様性を知りつつ、徐々に今後の進路の方向性を定めていく。フリースクールは、子どもたちが学校で感じ取る義務感や強迫観念から逃れたり、子どもたちが持っている「学校」という共通のトラウマを互いに攻撃したりせずに日常生活を送る場として機能している。更には、フリースクールに通う不登校の子どもをもつ親も意見交換や親同士の交流を深める役割を果たす。

さらに、フリースクールにて主に3つの格差が生じているが明らかとなった。その格差とは、学校に通っている児童生徒と施設の利用者との「学習内容」の格差、「学校・担任の不登校児童に対する対応」の格差、不登校の子どもに対する「親の意識」の格差であり、着目する場面によってみえてくる格差は異なることが示唆された。